



発行・古平町史編集委員会
編集・古平町史編集室
第八十三号（一日発行）
平成八年八月一日

北海の 古平風土物語 五〇

子供たちの四季の 遊びと仕事の手伝い (6)

高橋 源五

■秋の巻

九月に入って涼しくなってくる頃から、雨後の落葉林にはずいぶんと落葉キノコが出た。

当時、古平の町近くの山には落葉松の植林が多かった。漁業資材（杭・桁・丸太・さきり）や小屋材、土木工事用材、薪炭材などとしての用途が広がったのである。

雨上がりの翌々日あたり、手籠やふごを持ち、大きな荷籠を背負って、植えてから十年、十五年くらい若松の地区をねらって入る。ここで黄褐色をした滑らかな、丸々と太った手頃なものを採ることができた。敷きつめたように群生しているところ

ろも沢山あって、時には面白いぐらい容易に採れたこともあった。九月の降雨の後、三度くらいキノコ狩りを続けた。

茄子や豆腐を入れたキノコ汁には、小粒で太ったもの程うまかった。多くは樽に漬け込み、冬から春の鯀漁期にかけての食糧（汁の実、酢もの、油炒め）になった。泥の木、鴨居木、公園（畑通り）、沢江、本陣の沢

方面の者は、すぐ裏山にキノコが出るので、登校前でも松林に入って採ることができた。中には、二斗樽や四斗樽に数本も漬け込んでいる家もある。鯀漁期になると若い衆に食べさせるのである。

十月の中頃になると、山ぶどう・こくわ・河原ぐみが熟してくる。好天の日曜になると、仲間で大きな袋を持って紅葉の山に入る。山ぶどうの赤く色づいたきれいな葉は遠くからでもよく見えた。蔓のからまった高い木に登り、澄み渡った空を眺めながら、黒く熟した大粒の房をあさる。

紫色に染まった唇をし、いっぱいにくらんだ袋を背負い、

赤く熟した河原ぐみの枝をかざして、途中の家々から貰った秋りんごをかじりながらぶどう狩りの楽しい遠足をしたものである。浜町から二里（八き）程の泥の木川の上流にある名所・観音滝の方面まで、滝見をかねて出かけていた。家々では、山ぶどう酒やこくわ酒を造っては滋養酒として賞味していたのである。

—— 続く ——

アツイヘンゲのこと
曹谷から役人がリイシリの検分のため、沖合いへ出た時のこと、急に三、四百メートルの間の海水が赤くなり、船から十数メートル前の海水がうずを巻いた。

これを見たアイヌ人たちはみんな真つ青になり、ものもいわずに酒を海に供えようと急いでそこを離れた。

やがて、そこから十き程も離れたと思われるところまで来ると、ようやく波もおさまり、そこで船に帆をかけるとアイヌ人たちがたばこ

を吸ってひと休みをした。そこでさっきの不思議な出来ごとを尋ねてみたところ、通訳の太兵衛という者がアイヌに尋ねた。すると、「海であのようなことが起きた時は、決してその噂をしてはならない。あれはアツイヘンゲというものである」と答えた。

アツイヘンゲというのは年を経た大赤鯨（オオアサ）のことで、恐ろしいものであると身震いしながら話していた。

●不況から急速な発展へ
現地を視察した佐野隆一の熱心な推奨と懇請によって、鉄興社は稲倉石鉱山を買収することになった。

昭和五年四月、まだ雪の深い稲倉石に初代所長として石川利雄が赴任し、事務所兼所長住宅や従業員住宅の建設、選鉱場、ばい(焙)焼炉の整備などを急ぎ、採鉱を始めながらさらに鉱脈を探していった。

当時、すでに稲倉石鉱山では金勢坑・万勢坑という鉱脈から採掘をしていたが、調査した結果、万勢坑にさらに幅三メートル程の鉱脈のあることを発見した。

しかしこの頃、マンガンから製造されるフェロアロイが安価に輸入されるようになったため、国産のフェロアロイの売れ行きが減退し、従ってマンガン鉱石の需要も激減してしまった。

このような状況から採掘を続けても採算がとれなくなったの

—百年の歴史を閉じる—

稲倉石鉱山 (4)

で、昭和六年二月、操業から僅か一年で出荷を停止し、全従業員は山を下りて古平町で一待待機することになったのである。

その後、マンガンから二酸化マンガンを製造することになったため、再び鉱石の採掘をする事になり、石川所長以下従業員は八月元山に戻り、九月から作業を再開した。

これより先の昭和四年、世界的な大不景気であったことから日本の海外での市場は大打撃を受け、僅かに中国だけが海外市場として残されていた。だがその後、中国の国権回復を求める運動の高まりが日本の満州への政策と衝突し、昭和六年九月、日本軍による鉄道爆破からついに満州事変が始まり、中国は日本へのマンガンの輸出禁止を断行した。

このために製鉄に必要なマンガン鉱石の国内での価格が高騰し、これにより稲倉鉱山は急激な発展を遂げた。

在りし日の主人としてのん

(1)

波辺 ハツエ

昭和の文化は驚くなけれ旅客飛行機空を飛びちよつと出るにも地下鉄道路庭先散歩は自動車で、と、歌われたのは昭和の初期の頃でしたが、それから六十余年経った現在では、その文化の発展にただ驚くばかりですね。

昭和のはじめには一部の上流社会だけのものではあった自動車も、今では漁村農村を問わず、車なくして生活はできない程に人と車はすっかり密着してしましました。

車とは便利なもので、車の威力はたいしたもの。でもその反面、ときには殺人の凶器ともなり、公害を起こしているのも事実です。

わが家は、わずか〇・九トンの船外機付きの小舟でタコ漁をしている零細漁民です。車に乗ることなんて考えたこともなく、

自転車とリヤカーの力をかりて漁業に励んでいます。主人が漁に出て、私がいろいろと主人の手助けをする役を引き受けています。

漁具の運搬には二人で二台のリヤカーを使いますが、そんなときには二シトラック並みの働きをしたのではないかと思う程です。主人の帰港する時間に合わせリヤカーを引いて港へ行き、漁獲してきたタコを積んで市場へ行くのですが、そんなときはいくら重くても平気でしたが、最近は薄漁で、軽いはずのリヤカーを引いても足取りが重くなり寂しい限りです。

自転車とリヤカーは公害もなく、運動にもなる私の大切な愛車です。これからも元気にリヤカーと自転車を相手にがんばろうと思っています。

—— 続く ——



古平ホトトギス会



一穂の巨碑の目の下夏の海

本間正次郎

一穂の歌碑このあたり蟬しぐれ

果てしなく青田街道句おいけり

岩瀬みのる

もやはれて目にしむ程の青田かな

水貝やソーラン節の発祥地

熊谷楠丈

日和尚つづき神威の航涼し

山門はマーガレットに包まれて

越野すみ子

囀りや演奏指揮者おらずして

たんぽぽのレイを作れる親子かな

越野敏雄

薫風を入れて書斎を片づけり

夕端居心許せる人と居て

斉藤波留

サングラス掛けて変身して見たく

山の温泉に夜長を語る媼達

大島喜恵

暮早し路地の子の声いつか消え

この頃の風強かりし木の芽吹く

大和田絵伊

きらめきて春夕焼に海猫乱舞

橋下にしばしとどまる花筏

福井久美子

もう少し日照の欲しき青田かな

老ホーム運動会に初参加

山口浪

夏祭り帰宅十日の許さるゝ

座布団を仮の枕に大昼寝

水見句丈

手を净め供花剪る菊の庭に立ち

バスを待つ積丹原野日傘の娘

木村芳園

サングラスバス停に立つ姉妹

十尺の花イタドリソーラン碑

福井幸平

継がぬ子が来てサクランボもぎている



心天

福井 幸平

めったに食べることも無いが去年入院したとき、隣の患者さんが「食べませんか」と言ってくれたので、食べたところてんがあまりにもうまかったので、今になってふと思ひ出して書いてみることにしました。

これも『ホトトギス新歳時記』を見たら、次のような説明があつたのでご参考までに！

「煮て晒した天草を固めて作る透きとおった涼しげな食べ物で、常時水に漬けておく。底が金網になっている心天突でこれを軽く突き出して、酢醬油に辛子や海苔を添えたり、また蜜を掛けたりして食べる。云々」とあつた。季語は勿論夏である。

よく子どもの頃、母が作ってくれたのでなつかしい。前浜で潜って石花菜（これももんぐさと読む）を採ってくるのでお金はかからない母の得意のおやつである。

お金持ちは上品な硝子のこどんぶりで、辛子などつけて食べたようですが、俺たち貧乏人は三平皿に酢醬油だけだった。銀色にして無色に近い心天、母の顔と同様忘れられない夏の風味である。ではまた――。

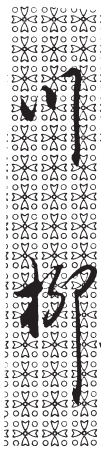
ところてん母なつかしく思いけり

ジョギングの人待ちくれし踊子草
羊蹄の車窓にひらくそばの花
法善寺波人波の日永かな
旅ながら清水寺の遅日かな
きのうけふ落いただいて漬けにけり
ひび割れの歩道にたんば顔のあり

仲谷美砂

越野清治

仲谷比呂子



石井愛子

眉月に浮かんで消えた母の顔
漁火に海猫のとびかう海が呼ぶ
祭の夜夫と酌みかわす酔心地
慕いつつ労わり合った夫婦坂

渡辺ハツエ

自分史を綴れば海がページ埋め
人の皮被ったオウム（教）のなれの果て



——夏を味わう——

とろろでん



竹内 コト

今ではもう家庭で見られなくなりましたが、昔は私の家でも毎年お盆が近づいてくると、母が「そろそろでんを煎じる支度をしなくては——」と、でん作りの準備にかかります。

材料になる天草（テングサ）は、私たちはその頃沢江に住んでいましたから、家の前の浜や歌棄のトンネル付近の遠浅の所で採りました。岩盤の所によく生えていて、モゾク（モズク）などといっしょに採ったものです。

採った天草は夏のうちによく乾かしておいて、それを翌年に使うのです。私のところでは何年か前のものまでありました。母が亡くなってからは誰も作る人がいなくなつて、それまでとつてあつたものは全部捨ててしまいました。近頃は、手間をかけて家で作るよりも買った方が簡単だということで、その季節

になると店から買います。もちろん今では、勝手に天草を採ることもできませんが——。

でも、こうして昔からの生活の習慣がひとつひとつなくなつていくのは寂しいことで、この時期になると思い出します。

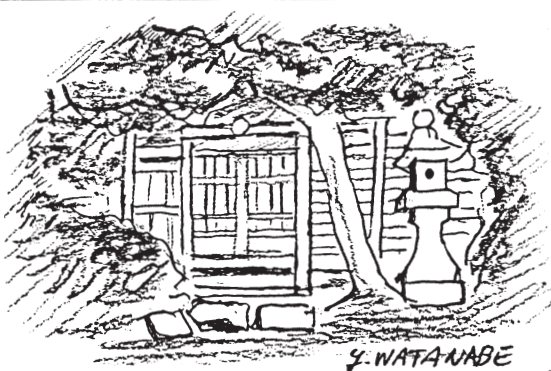
でんを作るとき母は、外に大きな薪ストーブとつば釜を用意し、天草をよくもみほぐして、ごみや砂を取り除きます。それを釜の中に入れ、煮立てくると大豆と酢を入れ、また、山から取ってきたぶどうのつるを入れたりします。私たち子どもは火の番をさせられますが、母は汗を拭きながら、釜からふきこぼれる汁の始末をします。煮立てた天草は手早くざるでこします。

これが一番煎じで、同じようにしてもう一回二番煎じをします。一度に何回か煎じるので、
（次ページ下段へ続く）

厳島神社

古平はエゾ地でも早くから開けたが、記録にあるのは慶長十一年（一六〇五）松前藩の支配地として古平場所となつてからである。

最初の場所請負人は、今の近江八幡市に本拠をもつ岡田家であつたが、厳島神社は、その岡田家が大いに関係していると考えられる。



S. WATANABE

ふるさとスケッチ

恵比須神社として創建されたのは宝暦元年（一七五二）といわれ、この場所はアイヌ語で「カムイミシタラ」神の・熊の・遊ぶところ」の意味だという。

天保十五年（一八四四）運上家支配人の城川長次郎が御影石の灯籠を寄進、翌年運上家が御影石の鳥居を寄進、そして五年後の安政七年、運上家帳場の門脇平治が弁財天の掲額を寄進、明治七年（一八七四）和田勘右衛門が弁財船絵馬を寄進したが、どれも現在まで残っていて、一見して歴史を感じさせるものばかりである。

明治十年頃、どうしたことかご神体（事代主命Ⅱコトシロヌシノミコト）が盗難にあい、それから名前が厳島神社になったと伝えられている。北後志では最も古い由緒ある神社のひとつでもあり、社殿に通じる一枚岩の階段は、ほかに例を見ない特徴のあるものである。

古平美術協会会長
渡辺 嘉 之

遙かなる故郷の思い出

[23]

古平祭りばやしのルーツ (3)

橘 義春

平成七年の三月に、今度は慎重を期して青梅市の観光協会へ電話をして確かめたところ、今年第三日曜日で、獅子舞もありますとの話だったので、準備万端を整えて就寝した。

翌朝、目が覚めたらどうも体調がよくない。胃袋の中に空気でも入っているようなムッとした気分である。風邪かなと思ったが、このチャンス逃した。また来年ということになるので、少し無理してでも行ってみようと思ひ、リュックを背負って家を出たものの、私の家からJRの駅まで行く途中で急に胸がムカムカしてきた。急いで家に引き返してトイレに駆け込んだとたんに、ゲロを吐いてしまった。もしもこれが電車の中だったら、小間物屋をひろげて迷惑をかけ大恥をかくところだった。これで二度目の挑戦も挫折

してしまった。平成八年の三月になり、いよいよ三度目の挑戦をすることになった。観光協会へ確認の電話を入れ、電車で青梅市へ出かけた。

天気はよく、梅の花も五分咲きぐらいであった。三十年前と違って、当時の田舎町もきれいな町に変身していた。プログラムで見ると、町おこしの一環ということでいろいろなイベントが行われていた。民謡ながし・屋台ばやし・和太鼓などで、獅子舞は午前十一時から十二時までの一回きりとなっていて、時間がないので大あわてだった。獅子舞をやっと探して当たった。は、もう始まっていたがどうも様子がおかしい。私が三十年前に見た獅子舞は、笛と太鼓と獅子頭の三人一組の素朴な一団だった。しかし、今度の獅子舞は

『三匹獅子舞』という名称で、三人がそれぞれ獅子頭を被り腹に小太鼓をつけている。越後獅子と同じスタイルだった。回りで大勢の子供たちが笛に合わせ踊っているが、笛の曲は三年前に聞いたものとは全然違うものであった。それでも何かの参考にとビデオにおさめた。

獅子舞が終わり、二列になって歩き出した。その時の笛の曲が、古平の山車の祭ばやしの曲にどこか似ていたようだった。獅子頭をつけたリーダーに話を聞いてみたところ、青梅市の近郊は郷土芸能の盛んな所で、獅子舞のグループだけでも四十五もあるそうなので、これでは探す手だてもない。ほとんどのグループは神社に所属しているらしい。

三度目の挑戦のつもりで張り切ってやってきたが、残念だ。古平町と青梅市の祭ばやしの曲が同じだなんて：：とても考えられなかったが、どこかにつながりでもあったのだろうか。

昔——明治か大正の初めにでも、青梅方面（西多摩郡）から古平へ移住して来た人がいなか

（前ページ二段目より続く）母は汗を拭き拭き忙しく立ち働いて大変です。こうして苦勞して作ったてんを、まず仏壇に供えたのです。

私の家は禅宗ですから、赤飯や煮しめ、白玉、盆菓子、果物などに家で作ったてんを墓前に供えます。

今も時期になると、何となくてんが食べたくなつて店から買ってきたが、昔、家で作っていたような素朴な舌ざわりはないようです。それと今は、すべての食品に言えることですが添加物のことが一番心配です。便利な時代になつて、それがもとで病院に行くようでは困ったことです。

ったのだろうか。役場の戸籍調べでわかりませんか。古平の山車の祭りばやしのルーツはいったいどこなのでしょう。

誰かこのロマンに挑戦してみませんか？——終わり——

（東京都小金井市在住）



岬短歌会詠草



春早き磯の若布を持ちくれし君と昔の鯨場語る

池田 テル

記念にと局舎前に揃ひし写真あり四十年なれば亡きひと多し

池田 テル

弥勒菩薩の印画を手にし吾が娘は念じてわれの枕辺に添う

越野 敏雄

我こそはと小亀すくひに氣負う児等直ちに失敗するを見て居り

榑 佳代

孫娘の初運転を見送りて帰宅遅きに眠らずをり

菅原 節子

光りつつ今し機は発つ関西空港かすむ淡路島を借景にして

鈴木 時子

群来ありしかの日の道を独り来て腰を下ろして海眺めをり

竹内 コト

秋されば鮭のぼり来しチョペタン川雪解水増しこんこんと流る

丹後 初江

亡き母がガーベラの花と大き葉活けてゐたりき遠き日思ふ

田中 香苗

絵画教室始まるに参加せり七十八歳の年も忘れて

長崎 フユ

迷信だというが

鯨漁場の禁忌

金比羅様と老船頭の話で大いに笑いつた四、五人の漁夫の中には腹を抱える者や、笑って涙を浮かべる者さえあつたが、やがてちよつと静かになつたとき、一人の漁夫が、

「俺たち鯨取りが産婦を嫌うの

「大漁を待つ」

鯨番屋の話題

お産を嫌う鯨漁場

は、どこからきた迷信なんだろう？」

と、独り言のように口を切るとゴクリとつばを飲み込んだ。すると、年がしらと思われる漁夫が、ボツボツと語り出した。

× × ×

鯨取りにお産の話は大禁物である。

「ベゴのこつ子（牛の子）が生まれたつて手紙が番屋サ着いただけで、イヤーな顔をする親方がいるんだ」

と語る程、漁場では極端にお産を嫌う。

前にこんなことがあつた。

『ある番屋の女中が、網起こしが始まろうとする間際になつて急に産気づいたが、船頭衆が寄つてたかつて情け容赦なく、とうとう裏山の小屋へ連れて行つてしまひそこでようやくお産をしたという。』

また、ある漁夫の妻がお産をすることに、わざわざ自宅

ん鯨が乗つてもう梓はいっぱいであつた。しかし不思議にも、この漁夫の番屋の建網には鯨の影も形も見えなかつた。

すると突然みよし（へさき）に立つた船頭が怒りの形相も物凄く、周りをにらみつけ、拳をにぎりしめて、

「コラ！ この馬鹿つたれ！

誰か産婦の所へ行つた者がいなか！」とどなった。

この声を聞いて震い上がった漁夫がおそるおそる、

「ヘイ、私で……」と名のり

出た。

「こんちくしょう！ よくも今まで黙りこくつていやがつた」と言つと、つかつかと漁夫の側へ来て、いきなり襟首をつかまえると海へ突き落とした。

やがて引つ張り上げられた漁夫は、あとで「あんな恐ろしい目にあつたことはない」と、誰にでも語つたという。

この漁夫が海に放り込まれるや、途端に鯨がドツと乗つてきてたちまち梓がいっぱいになつた。

そしてこんな時の漁場厄払いがまた面白い。もし産婦を見て

来たという客でもあつた時は、その客の帰つた後で家中に塩をまく。そして誰かが急いで火葬場に走り、かまから燃え残りの炭を拾つて来て家のたき火の中に入れる。またほかには、その燃え残りの炭を網の中に投げ入れることもあるという。

× × ×

この漁夫の因縁めいた話に、妙に緊張してしまつた一同はさつきまでの大笑いはどつかへいつて、やたらにたき火に薪ばかり入れていた。

